隠元禅師の中国での足跡を訪ねて(3)

副幹事長 福田哲也

次に訪ねたのが隠元禅師の生まれ故郷東林村。先ず隠元禅師が母の葬式を行ったとされる印林禅寺に参拝。地元の世話役はじめ村人が先を争うようにして我々を兜卒天宮・皆大欣喜・地蔵殿・林氏支祠などへと案内する。寒村であり一度に 18名という来客を迎えるのは、まさにお祭りのような気分であったのであろう、賑やかなひと時を過ごす。

14時30分、雪峰山崇聖禅寺へ向かう。山道は次第に狭く険しい道になっていく、にも関わらず、前方を走る大型トラックや農業用のトラクターなどを間髪入れず追い越していく運転手は名ドライバー？そのたびに肝を冷やしながら海抜約1000mまで登る。

山頂は平坦な土地が続く。幾つか点在する部落を通過するうちに即非禅師(明暦3年に渡来、崇福寺に入る)の雪峰寺に辿り着く。山門には「南方業林第一」の大額が掲げてあった。この山門前の道路を隔てた所に大きな池があり、池の対岸に古木をくり抜いた室の中で修行をしたといわれる「枯木庵」にもお参りしたが、解体・修復中であった。

崇聖禅寺院内に入りお茶の接待を受ける。部屋の正面には習近平国家主席の写真が掲げられていた。1996年福建省地区の幹部時代に訪れた時の写真とのことで、まだ若い主席の姿が写っていた。習近平が国家主席に就任後、「黄檗山万福寺に度々訪れ黄檗文化を学んだ…」ことを公言して以来、万福寺がにわかに観光スポットになっている、との話が出たが、午前中に万福寺を訪れた時、地元新聞・テレビ局の取材合戦も、その影響と思われる。

崇聖禅寺からの帰路は往路の逆、長く険しい下り坂を経て福清黄檗宗文化促進会本部に帰り着いたのは20時50分。往復約240km(約13時間)を走り抜いたことになる。直ちに同行者18名との懇親会。三日ぶりのビール(青島産)が五臓六腑に沁みわたった。

7月16日第4日目

今日はいよいよ中国政府高官(外務省福建省のトップ宋克寧主任〔習近平国家主席の側近のひとり〕)との会談日。我々も緊張していたが、林副教授・林会長の緊張度合いはかなりのものであった。会談に至った経緯は、林副教授から「長崎史談会の原田先生が隠元禅師の足跡を訪ね福建省に再来される…」ことを林会長へ、林会長がこのことを宋主任へ進言したところ、「お会いしましょう…」との快諾を得たとのこと。

会談場所は福州市にある中国政府専用の高級飯店「福州悦貨酒店」、時間は11時。渋滞などで遅刻しては一大事と文化促進会本部を8時30分に出る。が、あまりにも早く着きすぎて近くにある石竹山を訪ね、時間調整。小高い丘の上にあるこの寺は道教が主体だが、仏教の観音様や儒教の孔子も祭られて、“道・佛・儒”が混在する不思議な寺院であった。

さぁー、いよいよ会談の時間。黒檀造りの豪華な応接間の円卓に出席者全員のネームプレートが置かれていた。宋克寧(福建省人民政府外事辦公室主任)、羅冠升(福建省人民政府外事辦公室国際交流処処長〔通訳〕)、陳存楓(中国共産党福清市委員会常務委員・統戦部部長)、林観潮(厦門大学副教授)、林文清(福清市孔子学会会長)、邱筱燕(福建省外事辦公室主任科員)の6名と我々7名の名も確〔シカ〕と記されていた。名札の手前にメモ用紙が備えられてあるのを視、大切な会談であることが再認識され、改めて緊張が走る。

宋主任談話。「この度は黄檗文化の研究のため昨年に引き続き、訪中されたことを伺い、真に光栄であり、心から歓迎の意を表する。福建省と長崎が友好都市を制定して以来、民間交流が多岐にわたって継続されていることは真に喜ばしい。私も長崎には何度かお邪魔しているが風光明媚なところだ」、「私は習近平氏国家主席が主席に就任さられる前の福建省時代、側近の一人として仕えてきたが、主席は黄檗文化について非常に関心を示されていた。そして地元の人にも隠元和尚の研究に力を入れるよう示唆されてきた。それだけに貴方たちの研修を重要視している。研究成果などは福清黄檗文化促進会の方にもお教え願いたい。そして今後とも相互の友好関係がさらに深まることを切望する」(つづく)